

鉄くそぶとり

続旧聞日本橋・その二

長谷川時雨

青空文庫

あんぽんたんとよばれた少女のおぼつかない記憶にすぎないが、時が、明治十六年ごろから多く廿年代のことであり、偶然にも童女の周囲が、旧江戸の残存者層であつて、新文明の進展がおくれがちであつたことなど、幾分記録されてよいものであつたためか、先輩の推賞を得た拙著『旧聞日本橋』の稿を、ここにつづけることをよろこびいたします。

お夜食におくれて、遅く帰つて来た人のお菜に、天ぶらをとりにつた女中が、岡持のふたをあげながら、近所の金持ちの主人が、立食たちぐいをしていたということを、

「お薬缶やかんのようにテラテラ光つて——」

といったので、台所に湯気をあげている銅薬缶あかやかんの大きいのを見て、天ぶらやの屋台に立っていた、恰幅かつぱくのいい、額の長く光つた、金物問屋の旦那さんの顔を、あんぽんたんまでが思出して、一緒に笑つた。

堅気な町には、出前を重な蕎麦そばやがあるくらいなもので、田所町に蒲焼うなぎやの和田平、小伝馬町三丁目にも蒲焼の近三、うまや新道から小伝馬町三丁目通りにぬける露地に、牛肉

の伊勢重があるだけだった。

現^{いま}今は、人形町通りに電車が通り、道幅が広がっているが、人形町通りは大^{おお}門^{もん}通りと平行して豎に二筋ならんでいたのだが、大^{おお}門^{もん}通りの氣風と、人形町とはまるで違っていた。人形町通りは、昔の三座や、その他の盛り場のあつた名残りで、日本橋区中の繁華な場処^{どころ}なのに、大^{おお}門^{もん}通りは大^{おお}商^{しょう}家が、暖^の簾^{れん}をはずし、土に箒^{ほう}目^めをたてて、打水をすましてしまうと、何^{どこ}処^{どころ}もひっそりしてしまつて、大^{おお}戸^とをおろした店^み蔵^せの中では、帳合がすむと通いの番頭さんは住居に帰り、あとは夜学——小僧たちが居ねむりをしながら、手習や珠算の練習をやる。尤^もも、大^{おお}門^{もん}通りは名のごとく万治の昔、新吉原へ廓^{くわく}が移^ひけない前の、遊女町への道筋の名であるゆえか、大伝馬町、油町、田所町、長谷川町、富沢町と横筋にも大問屋を持つ五、六町間の一角だけがことに堅気な堅筋なので、住^す吉^{よし}町、和泉^{いずみ}町、浪花^{なにわ}町となると、葭^{よし}町の方に属し、人形町系統に包含され、柔^{やわ}らいだ調子になって、向う側の角から變つてくるのが目にたつていた。そして、劃^{かく}然^{ぜん}とではないが、もうそのあたりは大^{おお}門^{もん}通りとはよばなかった。大^{おお}門^{もん}通りの突当りといった。突当りの感じのするように和泉町が押出していてそれから道幅がせまくなり、ゴミゴミした裏に、松島町の長屋があつたのだ。

大^{おお}門^{もん}通りでは、屋台店も、表筋の道路へは遠慮して出なかった。横町の、人形町側へ出

はずれかける場所に、信用されている品のよい店が秋から春まで一、二軒出た。

屋台店の立食は、湯がえりの職人か、お店の人の内密食、そのほかは、夜長の、夜業をしまつたあとで時折買うものだと、大問屋町の家庭では下女たちまで、そんなふうに堅気にしこまれていたので、大所のおどころの旦那さんの天ぶらの立食は、なんとまあ呆れたものだというわけだったのだ。示しがつかないでございましょうとお爨どんでさえいうのだ。

立食旦那の家は、店蔵、中蔵、奥蔵、荷蔵と、鍵の手につらなつて、何処もかも暗い大きな家だった。奥深い店の、奥の方の棚に、真鍮の火鉢の見本が並べてあるのが、陽光の光がどこからさすのか、朝の間のある時、通りがかりに覗きこむと、黄色くキラキラ光つていて、黄昏に御仏壇を覗いたような店の家だった。

ああいう家は、金がうなつてゐるんだと、よく、町の細かい人たちは噂していた。庭は、横の新道までぬけた広いののに、住居にしている中蔵の前に、コチヨコチヨと石を積上げた築山をつくり、風入れや、日光をわざと遮つてしまつて、漆喰の池に金魚を入れ、夏は、硝子の管で吹きあがる噴水のおもちやを釣るした。

湯がえりの下駄の齒がカラカラ鳴つて、星が光る霜夜に、

「ま、め——煎りたてま、め——」

と火をばたばた煽ぐ音をさせたり、

「いなりさん——」

と、十軒店の治郎さんの、稲荷鮭が流してくるようにならなければ、おでんやや、螺の壺焼やも出なかつた。夜になると、人力車さえ通らない、この大店ばかりの町は、田舎のように静かで、夜が更け冴えて、足袋やさんが打つ砧が——股引や、腹掛けや、足袋地の木綿を打つ音が、タン、タン、タン、タン、カツツン、カツツンと遠くまで響き、鼈甲屋さんも祝月が近づくので、職人を増し、灯を明るくして、カラン、カン、カ、カランカランカんと、鼈甲を合せる焼ゴテの鑲を、特長のある叩きかたで、鋭く金属の音を打ち響かせている。そんな晩、らんぷや行燈の下で、てんでの夜業をしていた家々の奥のものが、夜のお茶受けに、近所にはばかりながら買いにやるのだが——

立食旦那の家内では、総出で、夜更けの屋台店に立並んでいる。暖かげな、ねんねこぼるてんへくるまつて、襟巻きをして、お嬢ちゃんも坊さんも——お内儀さんが、懐から大きな、ちりめんの、巾着を出して、ぐるぐると、巻いた紐を解いてお鳥目をつかみ出して払うのを、家の者に気がつかれないように、そっと女中にくっ附いていつて、女中の袖の下から、小さな鼻のように覗いていたあんぽんたんは、吃驚して眼を丸めた。

あんぽんたんは、自由に外へ出して遊ばせて貰えないので、物干にあがって空を見たりとんぼと話したり、瓦の間から、わらじ虫がゆつくり出てくるのを見ていたり、てんと虫を見つたりする。そんなときに、ずつと向うの、蔵と蔵との間の低い屋根に、小さな小僧が這出して来て、重そうな布団をひっぱり出して干すのをよく見た。あの金物やの小僧は、なんで毎日ふとんをほすのかと、祖母にきくと、「寝しなに、お餅を煮て、あつたかいのを、一切食べさせてやればよいのだが——としよりもいるのに。」

といったが、その年よりも、小僧も、景気のいい立食には並ばない。あたしは、すこし大きくなつてから、また訊いた。

「なんで、あんなことをするの、みつともないのにね。」

いつまでも、立食にこだわるようだが、問は、やっぱりそれだった。

「お金があるのにおかしい。」

女中さんが笑つたのとは違って、子供には、家内そろつて、みんな一緒でないのが訝しかったのだ。

「あすこは、古いお家だから、お精進日が多いのだろう。」

ああ、なるほど——と、ちいつぽけな者にも、その意味がわかるほど、古風な紙が台所

にさげてある家があつたのだ。

精進日覚、

×日 朝

×日 昼まで

×日 終日しようじん

そんなふうを書いて張つてあるが、三十日間に、幾日もあきのない家もあつた。御先祖さまの日、御先代の日、誰の日、彼の日、等々と、精進日つづきで、どんなけちんぼのときでもお魚をつけるおさんじつ（一日、十五日、廿八日）まで、お精進が繰込んでいる。

時によりものによつて、魚さかなの方が野菜ものより安価なところのある今日とは、魚うおの相場が大變違うので、大勢の人をつかう大家内では、巾着と相談の上から考慮された仏心ぶつしんであつたかもしれないが、土地がらに似合わない、洋服を着て抱え車に乗る、代言人の、わたしの父の家でさえ、毎月晦日みそかそうじがすむと、井戸やおへついを法印ほういんさんがおがみに来て、ほうろくへ塩を盛り御幣ごへいをたてたりしても、父も別段やめろともいわなかったようだ。その法印さんは眼のくぼんだ、色の黒い人で、小柄で、髪の毛をチョンボリ結んでいたようだったが、はつきりとしらない。神田今川小路の方の河岸かしつきの、引つこんだところに

閑寂な小庭を持つて、茶席めいた四枚障子の室がとつ附きにあつて、その室のうしろは土蔵で、蔵住居らしかった。かなり物好きな住居であつたのであろうが、あんぽんたんがわすれないのは、法印さんではなくつて、娘のお染さんという女だつた。

娘といつても、お染さんは、三十を越していたかと思うがその頃のおつくりは地味ゆえもつと若かつたのかも知れない。大柄な、色の白い人で、別段別嬪べっぴんとは思わないが、

『源氏物語』の中の花散る里——柳亭種彦りゅうていたねひこの『田舎源氏』では中空なかぞらのような、腰がふといやうで柔らげで、すんなりしてゐて、裾すそさばきのきれいなのが、眼にしみて消えな
いのだつた。花散る里を、後日お染さんによそえたのは、お染さんを忘れない日に見たその庭に、一本の梅の木があつて、花が咲いていたのが、そんなふうと思わせる種だつたのかも知れない。

お染さんのことで、母が、こんなことをいったのを、子供は耳をとめていたのだ。

「お染さんが手拭てぬぐいを出すのに、どれにしようかつて、葛籠つづらをあけると、役者の手拭ばかりが一ぱいはいつていて——」

あきらかに、驚嘆しているうちに、お染さんの何かを語っていたが、法印さんが死にでもしたのか、それきり家とは縁のない人になつてしまった。

「乾山けんざんの皿はどつきりあつたのだが、みんな、法印に賺すかされて、もってつてしまわれやがった。」

父は巻舌まきじたで、晩酌をやりながら、そんなことを言った。法印さんは、そんな品ものも見ろ眼があつたのだろう。

「おたきは、法印が仲人なこうどだもんだから。」

と、母が遠慮して、ほしがると何んでもやったというふうにいったが、母は、深川の豪商、石川屋という廻船問屋の御新造で、花菊といった自分の伯母もとさんの手許に、小間使をしていたのだから、法印さんは、その廻船問屋のかまどさまもお払いをしていたわけなのである。

ある日、お宅に法印さんが来るなら、宅うちでも御祈禱してもらいたいと頼んで来たのは、横浜ドルの弗相場しんだいで資産をこしらえ、メキメキと派手な暮しを展開してきた、古鉄から鉄物問屋になつた四ツ岸だつた。

鉄物問屋はみんな景気がよかつた。古鉄をあつかつた店なんかでも、すっかり紳商になつてしまつて、古い暖簾のれんの多い金物店通りでも、成上りが多かつた。裸一貫で仕上げて来

た人だけに、お精進日ばかりが重なることはないから、陽気な跳返った、人間欲望をまる出しに剥き出した、傍若無人な生活態度が、古い伝統の町に際立って見えた。

四ツ岸のおおかめさんは、閑取のような巨大な体を、小川湯にまでもってゆくのに、角力もうとりが小屋入りするような騒ぎで、謹つつましい町を行列して通る。小僧が二人、箒ほうきと衣裳いしやう籠かごと時によると敷座しきざの巻いたのを担いでゆく。女中が浴衣を抱え、おとのさんという赤熊しやぐまのような縮れ毛をした、ブルドック型の色の黒いお附女中が、七ツ道具を金かな盥ならいへ入れて捧げてゆく。今日きょう日は、花柳界もどきの、そんなふうな磨き道具を素人でも持つが、町家ちやうかの女房ではまずない図だった。

おおかめさんは、何時も、大勢の娘のうち二、三人を連れていた。娘たちは醜みにくかったが、父親に似て色の白いのや、母親似で太く逞たくましいので、とにかく四隣を圧し、押えに番頭さんの女房である瘦やせた、ヒヨロヒヨロの青黄ろい、皺しわの多い、髪の毛が一本ならべの女が附いてゆくのだ。

その番頭さんの女房も、お附女中のおとのさんも、おおかめさんの近親であるから、おおかめさんの豪勢ぶりも粗豪で異色があり、せまい小川湯は、たちまちこの一群に占領され特設のお風呂場のごとくなってしまう。

元来、大^{おお}所^{どころ}は、みんな自宅風呂があるのだが、土一升、金一升の土地に、急にのさ

ばり出したものには、金づくだけではその設備をする場所がないのだ。で、豪気な、おおかめさん一家は、けちけち町湯にゆくのが業^{ごう}腹^{はら}で、白昼大門通りを異風行列で練りだすのだった。ときによると、あんぽんたんまで、その人数に加えようと、借^{かり}にくるのだった。

あんぽんたんが可愛いから、売に来てやるんだと、たんかを切る、深川浜^{はまぐり}の蛤町^{はまぐり}からくる、俱梨伽羅紋^{くりからもんもん}々で、チョン髷^{まげ}にゆつていけるといふと威勢がいいが、七十五歳のおじいさ

ん江戸ツ子の小魚売は、やせても昔の型を追つて、寒中^{かんちゆう}でも素体^{はんでん}に半纏^{はんてん}一枚、空脛^{からすね}、

すこし暑いと肌ぬぎで銀ぐさをかけて、紺の腹掛と、真白^{ましろ}い晒布^{さらし}の腹巻、トンボほどな

小さな丁字髷^{ちようまげ}が、滑りそうな頭へ、捻^ねじ鉢巻^{はちまき}で、負けない気でも年は年だけに、小盤台

を二つ位しか重ねていないが、ちいさな鰈^{かれい}や、鯛^{こちう}がピチピチ跳ねていたり、生きた蟹^{かに}や芝

海老^{えび}や、手長^{てなが}や、海の匂いをそのままの紫海苔^{のり}と、水のように透^すいて見える抄^{すく}いたての白

魚の間から、ちいさなちいさな小蟹^{かに}だのふぐだのを選出^{より}してくれる、皺^{しわ}の自来也^{じらいや}の、年代

のついたいさみの与三爺^{じい}が、

「げッ、鉄屑^{かねくそ}ぶとりめ。」

と唾^{つば}きを吐きかけたが、おおかめさんは、それほど豊^{ゆた}やかに肥^ふっている。顔^{つや}は艶やかだが

赤黒く、体の肉は褻ひだごとつまみあげて、そこを切りとれば、美事な肉片が出来ると思われるほどだった。だから、その面積もたいへんなもので、体を拭ふくのに二人かかった。

ともかく、二人の先触れ小僧が、小川湯へつくと、他に浴客おきやくがあるうがなからうが、衣類きものの脱ぎ場ぬをパツパツと掃きはじめ、座ざを敷く、よきところへ着物を脱ぐ入れものをおく。それから尻しりつぱしよりになって、流し場へ、お湯を酌くんだ桶おけを積みあげ、ほどよく配置して、中央へその一堂の場席を大きく陣取って待ちかまえるのだ。馴ならされた小者は、他への気兼がねや、きまりのわるさなど、忘れてしまっているほど、おおかめさんが怖いのだ。口の中へ一ぱいに大福餅だいふくもちを押込まれたり、あの肥った体で踏んまたがれて、青坊主に剃そりたてられるのが愁こわいのだった。

そうだつて、小僧の一人、亀吉は剥身むきみ売りだったのだ。父親のいない、深川ツ子の剥身売りが、おおかめさんの台所の障子口から顔を突ツこんで、買つとくれようといったのが縁で、この連中が面白がつて小僧にしたのだから、氣に入らないと、剥身を売っていたとき、着物きせて、大門通りを歩かせるぞと言われるのが、よつぽど恥かしかったものと見える。

も一人の平三は、車力しやりきの親方の子で『菅原伝授手習鑑すがわらでんじゆてならいかみ』の寺子屋、武部源造たけべげんぞう

の弟子ならば、こいつうろんと引つとらえと、玄蕃げんぱんが眼を剥むきそうな、ひよわげで、泥す亀つぼんに似た顔をしている。亀吉の精悍せいかんさが眼立ちもしたが、平三の背景は亀吉とちがつて、おおかめさんの連合つれあいが若い時分、吉原の年明けねんあの女郎が尋ねてきたのを、車力宿で隠かく囲まつてやつていたというのが、不心得で、親たちがおおかめさんに忠義でないといわれるぐらいだった。

おおかめさんの風貌ふうぼうを、もすこし委くわしくいえば、体の大きさと眼との釣合は鯨くじらを思えばよかった。鼻は、眼との均衡がよいほどだが、豎たてに見えるほどの穴が実に大きい。私はこめん古面展覧会で鎌倉期の、だれだかの作で、笑った女の面が、眼も鼻もなく、顔の真中につぼまって、お出額でこと、頬つぺたと、大きなあこに埋まってしまって、鼻の穴だけが豎に上をむいた、いかにも親しみやすい平民の女の顔を見たとき、ふっと、おおかめさん一族の女に共通だったものを見て、お面に笑いかけてしまった。けれど、古面の方は眼が糸目なので——開いても柔らかいであろうが——おおかめさんは、小さな眼が、奥のほうで濁った鋭さをもっていた。

おおかめさんとは、大旦那に対する、大内儀おおなかみさんの意味で尊称なのであろうが、自分でいうとおおかみさんになり、出入りの相撲おすもうさん×山関がいうとおおかめさんとなる。

狼おかみかいというものと、大お亀かめの方が縁起がいいというものと、どっちもごっちゃだ。

おおかめさんの御機嫌にさからうと、

「どいつもこいつも、みんな出ていけ。」

と家中のものが、一集ひとあつめに頭から怒鳴られる。お品よく、お品よくと、お附女中から、

大番頭さんの女房まで揃えても、ともすると夏は諸もろはだぬぎになったりして、当り屋仲間の細君が、以前から大家たいけだったように勿体もったいぶつているのと、歩調が合わなくなると、

「あのお虎婆め、常磐津ときわづもろくに弾けない、もぐり師匠だったのを、わすれやがったか。」

と自分のおさとまでぶちわって、向う角の、蔵造りで、店は格子を閉めてある、由緒ありげに磨きあげて、構えこんでいる黒光りの角蔵かどくらを睨にらんで、その奥座敷におさまる比丘尼びくに婆の、紹ろの十徳を着た女隠居に当りちらすのだった。

おおかめさんは八丁堀の古着屋の娘、近所の古鉄商の若い衆で、田舎出だが色白で、眼鼻立のはつきりしたのに惚ほれこんだのだ。若い衆の方は、金がなくても、夜寝床から裸でぬけだして、駕籠かごで飛ばして行くと、吉原で花魁おいらんがたてひいたんだと、紳士になつてからも、湯上りにはすっかり形式をかなぐりすてて、裸になって、手拭を肩へかけ、立膝たてひざでお酒をのんで、土用のうちでも、蔵前のどじょう汁だとか、薬研堀やげんぼりの鯨汁好みが、汗

をふきふき、すっかり紳士面になりきってしまった仲間をこきおろすのだった。平日は重い口が、顔が赤銅色に染まると、

「××屋は、すっかり殿さまぶつちまやがつて、芸妓が来ても、おお、来たか、近う近うなんていやがる。夜つびてよ、蠟燭でよ、銭勘定したり、横浜までゆくのに、旅費がなくて、宿場の牛太郎までしやがったことわすれてやがる。」

それは横浜に居ついて、旧大名の真似をした暮しをしている、輸入商になった、当り屋仲間のことだった。そのまがい殿様の奥さまは、大柄な、毛の多い、顔色の悪い女で、つとめをしていた女の上りだった。

××屋は広い店と、広い住居をもっていて、主人は白い長い髪をひっぱり、黒ちりめんの羽織で、大きな茵に坐り、銀の長ぎせるで煙草をのみ、曲をおき、床わきには蒔絵の琵琶を飾り、金屏の前の大瓶に桜の枝を投げ入れ、馥郁と香を炷くというおさまりかたなので、

「いやな奴だ。」

と、くさしながら、どじょう汁の大旦那も、古道具やから、高価な偽物をつかませられる好いお顧客だった。

おおかめさんは、家^{うち}では金が出来てしかたがないのだといった。いつでも、せまいほど
 家のなかがウザウザして、騒^{そうぞう}々しい家^{うち}だった。樽^{たる}づめのお酒を誰かしら飲^{のみ}口^{くち}を廻して
 いた。放^{ほう}縦^{じゆう}だった。娘たちは、夜になるとねんねを着た襟^{えり}を、背中の見えるまでグ
 ツと抜衣紋^{ぬぎえもん}にして、真白に塗った頸^{くび}にマガレットに結^{ゆい}つて、薔薇^{ばら}の簪^{かんざし}を挿したり、結^{ゆい}
 綿^た島田に結^{むす}つて、赤と水浅黄の鹿の子をねじりがけにしたりして、お酒をのんでいた。
 おおかめさんが寝間着に寛袍^{どてら}をはおつて、大座ぶとんに坐り、それをとる巻いて振り将棋
 みたいなことをして、みんなが賭^かけた小錢を、ザクザクと、おおかめさんは座ぶとんや、
 膝^{ひざ}の間に押入れて、忽^{たちま}ちのうちに勝^{かち}つてしまふ遊びをした。パースでも、みんながかけた。
 おはなもした。

束髪^{さくはつ}の娘は英語の教師に走り、結綿^{むすめん}は駈落ちするところを、小僧^{こそう}の亀^{かめ}どんが見つけて騒
 ぎ出したので、かえつておおかめさんに叱^しられたのだといったが――末の子の、おっちゃ
 ちゃん^{ちゃん}が亡くなると、思い出してしようがないから、おないどしのあんぽんたんに遊^{あそ}びに
 来てくれと、贈^{くわ}りものをよこしては迎^{むか}いにきた。

「あれで、鬼^き子母神^{しほじん}さまなんだ。」

使^{つか}いに来た、先方とも此方とも共通の、近所の出入りの者がいうほど、足のわるい末^{すえ}つ

子を可哀がつていたのかどうかわからないが、あんぽんたんが借りられなければならないわけは、別にあつたのだ。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鉄くそぶとり

続旧聞日本橋・その二

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 長谷川時雨

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>